

石畳の路地裏

ローマ帝国時代から延々と守り続けられ、また時々には、民衆に防御と攻撃の武器を提供してきた石畳道路も1968年5月の大学紛争(5月革命)を期にして模様替えをし、アスファルトの道に変貌を遂げつつある。それでも歴史を重んずるパリらしく、アスファルトを剥がせばその下は石畳となっているらしいことは、凱旋門あたりの車が頻繁に行き交うところでは、摩滅したアスファルトから石畳が顔を出していることで、推察することができる。

アスファルト舗装がまったくなされていない石畳の道に出会うと、パリが死滅していない証拠を見つけたかのようにホッとす。たいていは路地裏とも呼べるほどの細い道だ。この路地裏こそ、パリの文化に出会う、絶好の場所なのだ。ギャラリー、骨董・古書の類の店が軒を並べている。絵画・彫刻の類は「ご自由にお入りください」と書いてあるが、よほど好みの画風に出会わない限りショー・ウインドウから鑑賞するにとどまる。エスニックな骨董、豪華な家具類は植民地主義下に略奪したものが流れているのだろうか、貴族・地主がどれほどの搾取で栄華を極めたのだろうか、けしからん歴史連想をする。

古書店は多種多様なジャンルの専門店がある。お気に入りには辞書、文学、哲学の類である。教育関係などもこうした古書店で見つけることの方が多い。フランス革命前後から第一次世界大戦ごろまでと長い期間を対象としているので、中に入り込み書棚を丹念に眺める。何度も通うのでムッシュ・マダムとなじみになり、「ボンジュール」、「オーヴォアー、アビアントオ」の挨拶もできるようになった。古書店のおもしろさは、たんに書籍だけではなく、リトグラフ、挿し絵なども豊富に揃っていることだ。これらも立派な芸術であり文化的特徴を持っているはずだが、パリに芸術・文化を求めてやってくる人々の間では、どれほどの地位を保っているのだろうか。

過日、リトグラフ・挿し絵のファイルの一つひとつめくって、目に留まった一枚のリトグラフがあった。門口の上に「ECOLE」(学校)と書かれ、門口の側に一人の男性が指さしをしながら立っている。11人の多様な年齢層の子どもが「学校」に今まきに入ろうとしている、白黒のリトグラフである。絵の下にはタイプライター活字で「ÉOLE. / Commenement des misères et des tribulations de la vie. (学校。／つらく苦しい生活の始まり。)」とタイトルが付けられている。画面左隅には「charla」の文字列が壁にいたずら書きされているかのごとく描かれている。その文字列の右隣には置き石が描かれているので、文字列はひとまとまりの意味を持つ単語でないことが分かる。charla(tan)と補って読めば「ペテン師」となる。ペテン師

